

審査委員長講評

平成30年度の千葉市小中特別支援学校総合展覧会科学部門は、市内の小中学校から科学論文724点、科学工夫作品271点の計995点に及ぶ出品があり、9月15日（土）から18日（火）までの4日間にわたって開催されました。会場となった千葉市科学館には4日間で延べ6,372人の方々が訪れ、熱心に児童生徒の作品を参観されました。4日間の開催としては、過去最高であった昨年度とほぼ同数の来場者であり、展覧会を通して、子どもたち、保護者の皆様、市民の皆様の関心の高さを改めて感じることでできる機会となりました。

作品の傾向としては、科学論文ではここ数年共通して、小学校、中学校共に夏休み期間中だけでなく、1年間を通じて研究した作品や昨年度の取組をさらに掘り下げて追究した継続研究が多く見られ、そのような作品の中から推奨作品が多く選ばれていました。ただ、インターネットで見つけた題材やこれまでに研究されたテーマや方法を、そのままの行った作品が見られたのは残念でした。科学工夫作品では、プログラミングを使った作品が一気に増え、作品の完成度の高いものが多く出品された一方で、今後は著作権をもっと意識した作品の製作をする必要性も強く感じました。

小学校の研究では、パソコンを利用し文章を打ち込んだり、表やグラフを作成したりした作品が増えています。また、研究の進め方で、「テーマ・仮説・実験・結果・考察・まとめ」と丁寧に行っているものが多くあり、普段の授業の成果が作品に反映されていたとしました。

中学校の研究では、1年生の段階で写真や図に加えデータを数値化し、グラフや表でわかりやすく表現したり、実験のアイデアや発想に優れた作品が見られたりしました。また、普段の活動で疑問に思ったことや身近なものから新たな発見を見出し、自ら問題意識を持って研究テーマを設定し、追究しているものもありました。日常の理科の授業での疑問と、この研究を通して得た探究の方法が、今後も相互に関連し深められていくことを期待します。

小学校の科学工夫作品では、1年生では「空気・ゴム・磁石」、2年生では「モーター」、3・4年生では「電池やモーターや磁石の活用」、5・6年生では「電気や電磁石を活用」した作品が多く、各学年での理科の学習内容を生かしたものでした。また、楽しい動きやゲーム性のある作品が多く、高学年になるに従って、動きが複雑になる傾向がありました。

中学校の科学工夫作品では、普段の生活を通して感じる不思議や不便さを自分なりに工夫し、時間をかけて仕上げた姿勢が作品にあらわれていました。特に、プログラミングや再現性を向上させる工夫が優れていました。当日の展示会場では、作品が実際に動いている場面を映像で見られるようにしており、作品のおもしろさや工夫されている点が参観者にわかりやすく好評でした。

千葉市総合展覧会における代表作品は千葉県科学作品展に出品され、大変優秀な成績を納めました。これは、日頃の学校での理科教育充実の成果であると考えます。今後も千葉市の総合展覧会科学部門が充実したものとなるとともに、これらの課題研究への取り組みが日常の理科の学習につながることを願っています。

最後になりましたが、ご尽力いただきました理科主任会の先生方、千葉市教育委員会教育指導課、教育支援課の皆様方に感謝を申しあげ講評とさせていただきます。